

ビジュアル版『とやまの和船』作成事業

和船建造技術を後世に伝える会

はじめに

当会は、廃絶が危惧される木造和船とその建造技術の記録・収集、及び調査・研究を通して木造船そのものと、その建造技術とを後世に伝承していくことを目的に、平成 16 年度より 10 年間にわたり活動を行ってきた。その成果は 4 冊の報告書として刊行し、広く一般に周知・普及してきた。

ただ、調査報告書の形式ではとっつきにくさがあり、和船とその建造技術の普及と伝承のため、より一般向けのものとしてジュニア版の冊子を刊行する必要性を感じている。そこで図面や写真、イラストを充実させた『ビジュアル版とやまの和船（仮）』を刊行し、富山県内を中心とした図書館、博物館等に頒布するほか、県内の小中学校に頒布し、これまでの調査成果の公開に努めるため、今回の事業を実施した。

事業の概要

初年度である平成 26 年度は、ビジュアル化に向けてこれまで蓄積してきた図面や写真など調査成果の取りまとめを行った。また、和船についてよりわかりやすく提示する方法として、和船模型の活用を考え、網取り船として長く富山湾の定置網漁を支えながら、すでに現存しない氷見型ドブネの船尾部カットモデル（1/2 スケール）を製作した。合わせて補足調査として石川県能登町と同じく石川県輪島市に現存する能登型ドブネの現地調査、神通川のササブネの実測作業などを実施した。



輪島市曾々木海岸のドブネ



神通川のササブネ

『ビジュアル版とやまの和船（仮）』について

本事業の眼目である『ビジュアル版とやまの和船（仮）』の作成については、次年度以降の実施となる。今年度は、使用する写真や図版の選定、編集作業を行ったところであり、いまだ詳細については未定だが、できるだけ写真や図を中心とした紙面構成となるよう心掛けたいと考えている。

次ページ以降に示したのは、当会が作成した和船の解説パネルの一例である。このように写真や図面を多用することで、船と船が支えた人びとの暮らしを伝える一助としたい。

和船と漁撈

豊かな漁場が広がる富山湾では、古くから定置網をはじめとする漁撈活動が営まれてきた。定置網の操業は史料のうえでは近世初期にすでに確認でき、そのほか刺網や地曳網などが行われていた。

これら漁撈活動には、10mを超す定置網の網取り船をはじめ、小商売の漁師が用いる5m前後の小型の船まで、大小さまざまな船が使用されてきた。現在では、海船のほとんどがFRP（繊維強化プラスチック）船や鋼鉄船となっているが、昭和40年代の後半頃までは木造の和船が使われていた。だが、戦後には焼玉エンジンやディーゼルエンジンを積んだ動力船が普及し、さらにFRPなどの新素材による造船が盛んになったことで、木造の和船は次第に姿を消していった。

多様な和船が用いられてきた富山湾周辺地域ではあるが、近年そのほとんどが消失し、ごくわずかな数が残るのみとなっている。また、和船そのものだけでなく、和船の建造技術や和船を用いた漁撈習俗もその廃絶が危惧されている。



テントから荷揚げされるマグロ（昭和10年・氷見市上庄川河口近くの棧橋）

昭和9年、10年の氷見では、夏網（まぐろあみ 鮪網）で捕るマグロが大豊漁だった。荷揚げされているのは、100kgを超えるクロマグロ。氷見では、シブとかシビ、オオタロウと俗称された。夏場の高い外気温を嫌って、マグロは川水の中に沈められている。



テントによる網取り（昭和30年代・氷見市灘浦大敷）

無動力のテントの船上に並んだ12人ほどの漁師が一斉に網を取っている。この時期のテントは、動力船の曳船に曳航されて網場へ向かった。写真右後方に曳船が一部見える。写真左側のテント手前の小船は、網回りの作業船として用いられたテンマ。



イワシの大豊漁（昭和40年代頃・氷見市灘浦大敷）

網取りに使われているのはテント型動力船。テントに焼玉エンジンやディーゼルエンジンを積んだ動力船は戦前からあったが、網取り船に動力船が用いられるようになったのは、氷見では昭和30年代の末頃からだった。

さまざまな和船

富山湾の沿岸部で使用された和船は、オモキ造りの大型船ドブネ、板合わせの船である一枚棚構造（平底）のカンコ、二枚棚構造（三枚底）のテント、サンパ、キンパチ、テンマと、その構造や大小によってさまざまな船種に分けられる。また、これらとは別に県内の各河川や潟では、川舟も利用されていた。

オモキ造りとは、丸太から削り出したオモキと称する部材を底板の左右両端に組み込んだ構造で、京都府と福井県にまたがる若狭湾から秋田県の男鹿半島までの日本海沿岸地域に分布する。オモキ造りによる船は、一般に丸木舟（削舟）から板を接ぎ合わせて造る構造船へと変化する過程にある準構造船に分類される。近世には板材を接ぎ合わせた棚構造をもつ船が主流となるが、日本海沿岸地域の漁撈には引き続きオモキ造りの船が併用されていた。一方、板合わせの船は底板に棚板を接ぎ付けた構造を有し、棚板が左右各一枚のものが一枚棚構造、上棚と下棚の左右各二枚となるものが二枚棚構造と呼ばれる。



曳船に曳航され、灘浦大境漁港に帰港するドブネの船団
(昭和37年10月19日・氷見市大境沖)

昭和30年代後半の氷見灘浦では、ドブネが現役の網取り船として使われていた。船上に立てられているのは操船用の櫂。操船には、櫂8~10丁のほか、艫櫓1丁、脇櫓2丁が使用された。



地曳網の操業後、浜に曳き揚げられているカンコ
(昭和20年代頃・氷見市藪田)

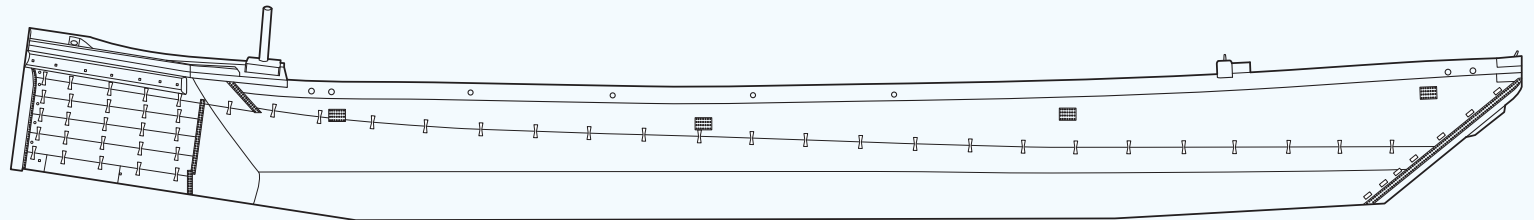
カンコは平底で比較的軽かったため、漁の後砂浜に揚げるのに都合が良かった。



浜に曳き揚げられたテント (昭和30年代頃・氷見市中波)

木造船は、長期間海に浮かべておくと船底に貝殻や海藻が付着して重くなったり、腐食してしまうおそれがあった。そのため漁期が終わるごとに浜へ曳き揚げ、船底の点検と補修が行われた。まず、藁束を燃やして船底の付着物を焼いた後、貝殻や海藻をこそげ落としてペンキを塗り直した。

富山湾周辺地域の和船対比図



ドブネ（氷見型）

富山湾周辺地域の和船

ドブネ 全長14~15m

底板の左右両端にオモキという剝材が使用されたオモキ造りの大型船。富山県内では魚津、滑川、岩瀬、新湊、氷見などで使用され、能登半島の内浦、灘浦にも同規模のものがあった。箱型の船形のため積載性に優れ、網漁に適していたため、近世以来台網（定置網）漁の網取り船として活躍した。また、魚津では地曳網漁にも使用された。建造費が高く、大きなスギ材の確保が困難になったことなどにより、昭和35年頃を最後に新造されなくなった。

カンコ 全長4.5~9m

一枚棚構造（平底）の船。魚津や伏木、氷見、朝日町などで確認できる。船足はあまり速くなかったが、比較的丈夫で長期間使用できた、という。チョロガンコと呼ばれる全長4.5mほどの小型のものから、9m近い大型のものまで、用途によってさまざまな大きさのものがあった。全長5~6mの小型のカンコは手繰り網や延縄漁、タコツボ漁などに、全長8~9mの大型のカンコは罾網の網取り船のほか、地曳網の網船として用いられた。また、大型のカンコ型動力船は荷船としても使用された。朝日町ではカンコのことをコンコロブネやゴロタブネなどとも呼び、ワカメ採りやオイボ釣り、イカ釣り漁などに使用された。

テンマ 全長4.5~6m

二枚棚構造（三枚底）の小型船で、荷物の運搬や酔のほか、一本釣り漁やタコツボ漁、磯見漁などにも用いられた。氷見では、平底に近い船形の氷見型のテンマが定置網漁の作業船にも使われたほか、昭和20年代以降はより波切りの良い船形を持つ、能登外浦型のテンマが刺網漁の漁師らに使われるようになった。

キンパチ 全長4.5~7.5m

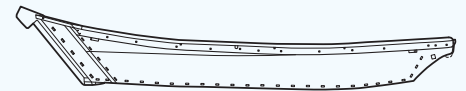
二枚棚構造の船。キンパツ、ケンパチともいい、朝日町、黒部、滑川、水橋、氷見などで確認できる名称である。地域によって、その名が指す船形は異なっていたようだが、詳細は不明である。現存する船は、朝日町宮崎で使用されたキンパチで、船首の形が改良されカイソウセンと呼ばれたもの。イカ釣り漁やワカメ採りなどに使用された。

テント 全長7~12m

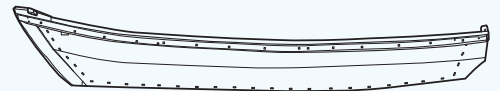
二枚棚構造の大型船。波切りの良い船形が特徴で、氷見型のテンマを大きくしたのがサンバ、能登外浦型のテンマを大きくしたのがテントである、とされる。テントという名称が用いられない地域もあるが、同型の船は入善町以西の富山湾一帯に分布している。新湊以外の地域のテントには、船底にオモキという剝材が組み込まれており、オモキ造りの影響を受けた船とされよう。対照的に新湊のテントは、オモキがないスマートな船形が特徴だった。戦後には、焼玉エンジンや、ディーゼルエンジンを積んだテント型動力船も盛んに建造された。

サンバ 全長7.5~15m

テントと同じく二枚棚構造の大型船だが、平底に近く、大きく胴が張った船体の特徴だった。岩瀬、新湊、氷見のほか、石川県七尾市の能登灘浦でも用いられた。テントに比べやや造りが弱く、船足も及ばないといったが、積載性に優れていたために定置網漁の網取り船に使用された。現存するサンバは、七尾市の庵で使用されたもので、氷見の造船所で建造されたと考えられる。



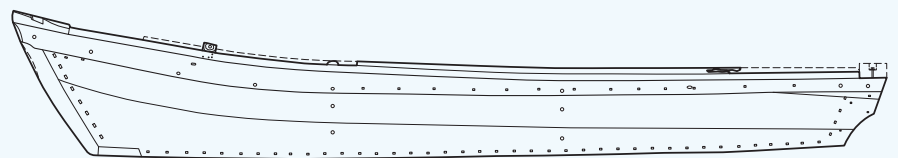
カンコブネ（朝日町宮崎）



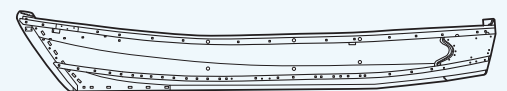
チョロガンコ（氷見市地蔵町）



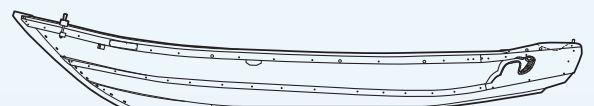
カンコ（氷見市北大町）



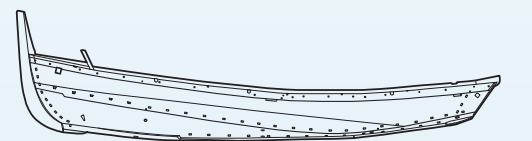
カンコ（氷見市地蔵町）



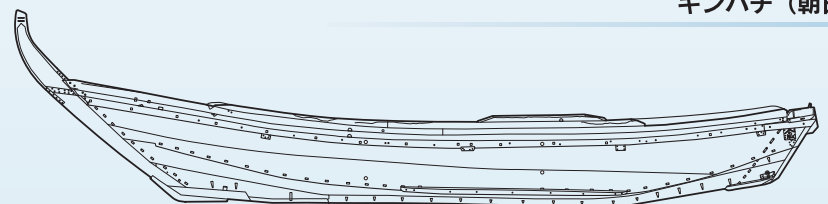
氷見型のテンマ（氷見市中波）



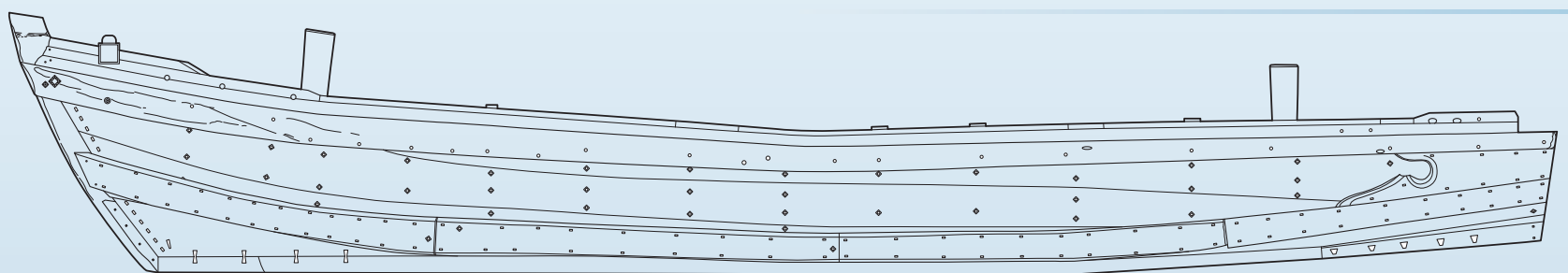
能登外浦型のテンマ（石川県志賀町大島）



キンパチ（朝日町宮崎）



テント（入善町芦崎）



サンバ（石川県七尾市庵）

